松江歴史館NEWS

MATSU REKI

NO.5
2023
SUMMER

特別展

漆壺斎と勝軍木庵（しっこさいとぬるでのあん）

―花開く松江の漆文化―

初代小島漆壺斎作
「菊蒔絵棗」（当館蔵）

勝軍木庵光英作「菊蒔絵棗」
（京都国立博物館蔵）

3代小島漆壺斎作
「一閑張菊桐蒔絵茶器」
（当館蔵）

漆壺斎と勝軍木庵。松江藩主に取り立てられた出雲の名工である両者の作品が、島根県内外から一堂に会する。

受け継がれた伝統は、江戸時代から令和の現代へ。

■Contents

企画展「みんなの小学校　150年のあゆみ」開催案内 … 2
特別展「漆壺斎と勝軍木庵」開催特報 … 3
新収蔵品紹介 … 4
コラム「雲陽秘事記あらかると」 … 5
第４回（名誉館長 藤岡大拙）
基本展示ピックアップ … 6
松江歴史館のお仕事　―保存管理について― … 7
INFORMATION：松江城登閣VR … 7
地域ゆかりの資料紹介　―秋鹿町編― … 8

企画展

松江市小学校開校150年「みんなの小学校 150年のあゆみ」

開催中！

入学式〔昭和20年代（1940年代）〕（当館蔵）

明治５年（１８７２）、近代的学校制度を定めた学制が発せられます。松江では翌年４月に初めて小学校が開校しました。最初の小学校は、新町の洞光寺内に置かれた雑賀南小学（現在の雑賀小学校）です。以来、各町に開校し、制度の改変や統合分離を繰り返して現在に至ります。

本展では、松江の小学校に残る教育資料や写真を通じ、各時代の教育や子どもたちの様子などから150年間の小学校のあゆみを振り返ります。玄関ホールでは、学び舎を回顧できる、松江市内の小学校校舎の古写真を展示します。

「外はみんなの遊び場だった」

男子の遊び〔昭和８年（１９３３）〕（松江市立中央小学校蔵）

▲宍道湖の近くにあった小学校に通う６年生が、昭和前期（1930年代）の男の子の遊びを１か月ごとに描いたもの。夏は６月が野球、７月が水泳、８月がとんぼつり、９月が魚釣である。背景には宍道湖畔であろう水辺や松江城などが描かれており、当時の子どもたちが周囲にある自然を遊び場としていたことがわかる。

「100年以上前から変わらない姿」

ランドセル〔昭和30年代（1960年頃）〕（米子市立山陰歴史館蔵）

▲ランドセルは明治中期に学習院初等科で使用した通学かばんが起源とされている。皮革製品で高級品であったため、一般に普及するのは昭和30年以降である。この赤色のランドセルは一般化した頃に女の子が使用した。形は現在のものとほとんど変わりないが、一回り小さく、本革を使用しているため重たい。

企画展「みんなの小学校 150年のあゆみ」

令和５年（2023）
７月21日㈮～９月24日㈰

［休 館 日］毎週月曜日
※9月18日（月・祝）は開館、翌19日（火）が休館
［開館時間］９：00～17：00（観覧受付は16：30まで）
［会　　場］松江歴史館　企画展示室
［主　　催］松江歴史館
［共　　催］松江市教育委員会
［観 覧 料］大人500円（400円）　小・中学生100円（80円）
※基本展示室とのセット券：大人800円（640円）
小・中学生300円（240円）
※（　）内は20名以上の団体料金
※高校・大学・専門学校に通う学生は学生証の提示で団体料金

各種イベント等の詳細は企画展チラシやホームページでご案内しています。

特別展

「漆壺斎と勝軍木庵 ―花開く松江の漆文化―」

開催特報！

初代小島漆壺斎（?―1830）は、松江藩松平家7代藩主松平治郷（不昧）に取り立てられ、号を与えられた塗師です。代々漆芸を家業とする漆壺斎の作品は、塗りと品格のある蒔絵に特徴があり、全国でも高く評価されています。中でも初代小島漆壺斎の手掛けた茶道具は、不昧の美意識を伝える品として各地で大事に伝えられています。

勝軍木庵光英（1802―71）は、松江藩松平家9代藩主松平斉貴のお抱え蒔絵師でした。光英は、豪華な高蒔絵を得意とし、棗、香合、印籠、硯箱、文台などの作品を多く残しています。

本展では、出雲の名工として名高い両者の作品を紹介し、松江の漆芸文化を振り返ります。

4代小島漆壺斎作「七宝花菱唐草蒔絵鮟鱇茶器」（京都国立博物館蔵）

初代小島漆壺斎作「菊蒔絵棗」（当館蔵）

不昧の美意識を伝える棗

蓋の甲に金の平蒔絵で表菊と裏菊を描く。黒漆で同じ文様を描いた「やみ菊棗」もあり、表菊と裏菊の組み合わせが茶人に好まれた文様であることがうかがえる。畳付に黒漆で「漆壺斎（花押）」と記す。

小島漆壺斎は、松平治郷（不昧）のお好みの茶道具を多く制作した工人を初代とし、不昧の美意識を後世に伝えるため、何代にもわたり同じ作品を作ってきた。現在、7代目がこれまでの流れを継ぎ、現代にも漆壺斎の技術が伝わっている。

豪華で緻密な蒔絵技法を駆使した印籠

金粉を蒔き詰めた地に金銀の高蒔絵で富士山や三保の松原、薩埵峠などの名勝を緻密にあらわす。描かれた景色をよく見ると、座って休憩する旅人や宿場町の往来なども描いており、みどころが多い作品である。印籠の内部は金梨子地、底に「光英」の銘がある。

勝軍木庵光英が師事したといわれる梶川家は、幕府の御用蒔絵師をつとめた江戸時代を代表する蒔絵師の家系で、印籠をはじめとした多くの蒔絵作品を制作した。

勝軍木庵光英作「久能山三保富士薩埵清見図蒔絵印籠」（当館蔵）

特別展「漆壺斎と勝軍木庵 ―花開く松江の漆文化―」

令和5年(2023)
10月20日(金)～12月10日(日)

［休 館 日］毎週月曜日
［開館時間］9：00～17：00(観覧受付は16：30まで)
［会　　場］松江歴史館　企画展示室
［主　　催］松江歴史館
［観 覧 料］大人600円(480円)　小・中学生300円(240円)
※基本展示室とのセット券：大人880円(700円)
小・中学生440円(350円)
※（　）内は20名以上の団体料金
※高校・大学・専門学校に通う学生は学生証の提示で団体料金

各種イベント等の詳細は特別展チラシやホームページでご案内しています。

新収蔵品紹介

松江歴史館では、歴史資料や美術作品を中心に、収集方針に基づいて資料を収集しています。松江市域あるいは江戸時代の出雲国の歴史や文化を語る上で欠かせない資料、そして山陰地域、日本、さらに世界の歴史や文化にとって重要な資料が地域から失われるのを防ぎ、後世へ受け継ぐとともに、その価値を調査・研究・展示によって発信していきます。

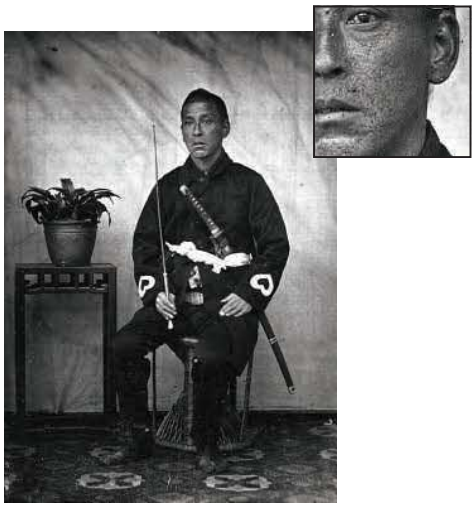
出雲国出身の画家による華やかな屏風

黄仲祥筆《花鳥図屏風》（令和４年度　購入）左隻

右隻に大きな松とつがいの鶴を、一方左隻には竹や太湖石、つがいの孔雀を描きます。いずれも色とりどりの草花で埋め尽くされた、華やかな画面です。画題から、祝いのために描かれたとも想像されます。

作者の黄仲祥（1814―1880）は名を横山雲南といい、当地出身の代表的な画家で、幕末明治期に活躍しました。黄仲祥は現在の雲南市三刀屋町に生まれ、はじめ広瀬藩御用絵師の堀江友聲に画を学んだといいますが、その後、禅僧・風外本高の画の講義を受け、南画家に転向しています。黄仲祥の現存作品は山水画が多いように見受けられる中で、花鳥画の貴重な作例といえるでしょう。

あばたの残る松江藩士

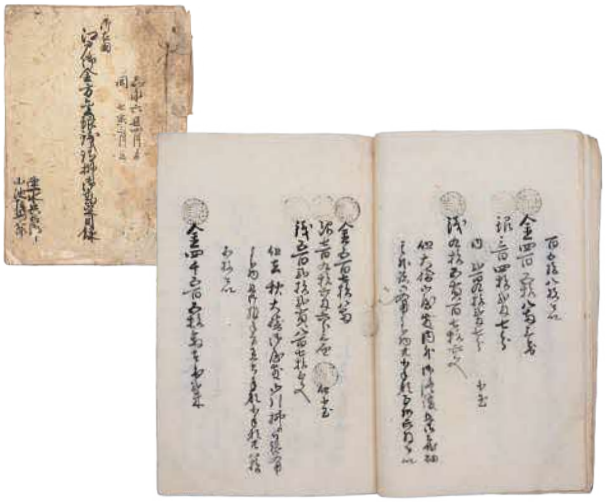


坂田喜大夫写真（令和４年度　寄贈）

写真の人物は箱書から、松江藩士の坂田喜大夫だとわかります。『松江藩列士録』によれば、喜大夫（『列士録』では猪大夫）は嘉永３年（1850）に父の跡を継ぎ、130石を給した人物です。慶応４年（1868）閏４月に京都の山崎の警固を命じられ、翌明治２年（1869）の春まで関西に駐屯していました。箱書きには、明治元年（1868）秋に大坂の写真師中川真輔が撮影したと記されており、行動歴と一致します。

顔を拡大すると、天然痘に罹ったために残る痘痕（あばた）らしき痕が見えます。松江藩では嘉永年間以降に生まれた人は天然痘の予防接種（種痘）を受けたため、あばたを残す人は少なくなったといいます。

松江藩のお金の出入り



御在国江戸御金方金銀銭御払御勘定目録
（令和４年度　寄贈）

嘉永６年（1853）４月から翌年３月までの、江戸における松江藩の金銭の出入りをまとめた帳簿です。江戸御銀奉行が決算し、松江の御勘定所に提出しました。巻末には勘定奉行らが確認の印を押しています。この年度はちょうど藩主が松平斉貴から定安へ交替したタイミング。そのため出雲国への初入国や将軍への御目見など、家督相続に関する支出がみられます。大崎村下屋敷引き払いの経費、海岸防御の兵糧米代などがあるのは、ペリーの来航という大事件が起こった影響です。「御時斗」修復代は、時計コレクターの斉貴が収集した品の管理費かもしれません。

第4回

雲陽秘事記あらかると

松江歴史館
名誉館長　藤岡　大拙

雲陽秘事記

何時、誰が著したか分からないが、人から人へ書き写されて伝わった逸話集。松江藩松平家初代藩主直政から六代藩主宗衍の時代までが取り扱われ、後、八代藩主斉恒までが追記された。収録された約二百話にも及ぶ記事は、虚実混交の憾みがあるとはいえ、よく吟味して読むと、松江藩の歴史の深叢に分け入ることができる。

松平宗衍のお国自慢

宗衍（天隆公）は松江藩松平家六代目の藩主。彼の父宣維は三十四歳で他界したので、宗衍はわずか三歳で藩主となった。彼がはじめてお国入りをしたのは、十七歳の時だったから、出雲の人々は実に十四年間も殿さまの顔を見ることはなかった。

宗衍が藩主になった翌年、すなわち享保十七年（一七三二）から、史上有名な享保の大飢饉が始まり、連年飢餓状態が続いた。青年時代の宗衍は、御直捌（親政）を行って何とか人民の窮状を救い、藩財政の立て直しにも努力したが、効果はあまり出ず、疲れ果てて三十九歳で致仕（官をやめて隠居すること）した。投げ出したわけではない。後事を十七歳の我が子治郷（のちの不昧公）と家老朝日丹波茂保（のちの郷保）にしっかり託して、しかるのち隠退したのであった。

宗衍が現役の頃、江戸城内で顔なじみの大名と雑談しているとき、ついお国自慢が口からこぼれた。『雲陽秘事記』「御国産三品江戸へ出る事」に載っている話。

宗衍が江戸城中で同席の大名と雑談しているとき、

「わが松江藩の領内には、長さ三尺（約九〇センチ）の鮒、茶釜ほどもある蕪、房の長さ六尺（約一八〇センチ）の藤の花房がありますのじゃ」

と自慢げにいった。同席の諸侯たちは、

「それはぜひとも見たいもの」

と所望した。宗衍はつい口がすべったことを後悔したかもしれないが、とにかく江戸屋敷からは国元松江へ伝令が飛んだ。

国元では懸命に領内を探しまわったことだろう。その結果、探しあてたのである。長さ三尺六寸の大鮒を神西湖（出雲市）で捕らえた。六尺の藤の花は市成（松江市西川津町）の御立山（藩有林）で見つかった。茶釜のように大きな蕪は、楯縫郡（出雲市）平田町の百姓の牛小屋の後ろで見つけたという。

宗衍は胸をなでおろしたことだろう（鮒はどうして江戸へ運んだろうか）。

ところで、松江藩には他藩に誇るべき名産がある。『雲陽大数録』（宝暦四年（一七五四）ごろ、宗衍の青年時代に成立）という書物の、名産という項に載っている。紹介しておこう。

十六島海苔、真梨子、大庭梨子、艫島鰤――以上将軍への献上。

松江鱸魚、松江蓴菜、渡橋加儀茶、日御碕和布、神在湖鯉鮒、吉田香茸、平田蕪、八川蕨、猿正独活、熊野茶、宍道湖鰻、十神海雲、加賀和布、岡本牛房、万田松茸、薦田芹、出西生姜、野白紙。その他に、一成蜆、片江海苔、関小鯛（若狭小鯛トも云）、大井芹、矢尾煙草、浜煙草、紫菜、塩味葛。

宗衍が吹聴したものが二つも入っているではないか（鮒と蕪）。してみれば、彼は出雲の産物をしっかり認識した上で、自慢していたことになりはしないだろうか。

松江歴史館
基本展示
Pick up！

松江藩と教育

松江城の東隣、家老屋敷の跡に建つ松江歴史館では、城下町の成り立ちや松江藩の歴史と文化をテーマとする基本展示を常時開催しています。いつ訪れても見ることができる約100件の資料の中から注目の展示品を紹介します。

令和5年（2023）は松江に初めて小学校が設けられてから150年の節目です。このことを記念する企画展「みんなの小学校　150年のあゆみ」にちなみ、あわせて見てほしい江戸時代の教育に関する資料をピックアップします。

展示コーナー　藩政改革とその後の松江藩

藩士の心得　文武の芸を磨くこと

延享４年（1747）、当時19歳だった藩主松平宗衍（むねのぶ）は自ら政治を取り仕切る決意を告げ、「直捌（じきさばき）」（親政）を始めました。その直捌を止めた宝暦２年（1752）に宗衍が下した、藩士が守るべき18か条の決まりに文武の芸についての一条があります。

家中制法（当館蔵）

ここに注目！

「文武の芸はどのような年齢・地位・役職であっても別け隔てなく心掛けるように」とあります。武士にとって学問と武芸の鍛錬は常に行うべきものでした。

展示コーナー　計画都市（城下町）松江の形成

武家屋敷にあった藩校と道場

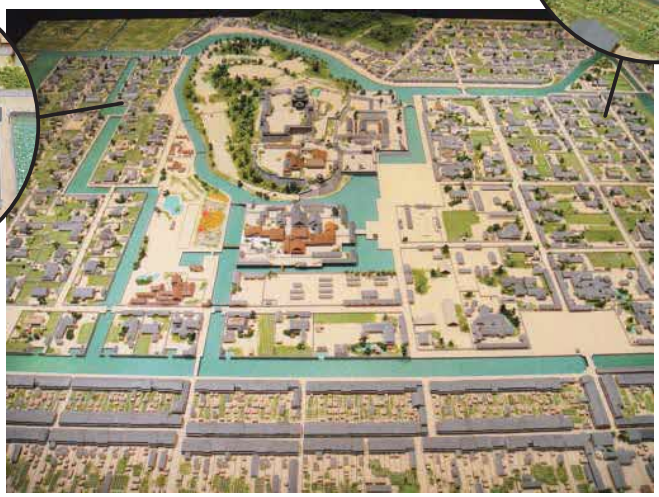
江戸時代末期の松江城下を600分の1スケールで再現した模型。文武の教育の場を模型の中から探してみましょう。

ここに注目！

藩士は儒学者桃家の屋敷内にあった藩校「明教館（めいきょうかん）」で学びました。「明教」は儒学の経典「荀子（じゅんし）」にちなんだことばです。

ここに注目！

「不伝流居相（ふでんりゅうい あい）」の道場は師範荒木氏の屋敷の一画にありました。武芸にはさまざまな流派があり、指導者に弟子入りして技を身に付けました。



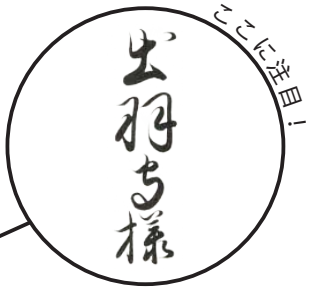
松江の城下模型

展示コーナー　藩政改革とその後の松江藩

寺子屋の教科書

庶民は寺子屋で、文字を書くこと（習字）、本を読むこと（読書）、計算すること（算術）などを学ぶことができました。習字で教わる文字は御家流（おいえりゅう）（青蓮院流（しょうれんいんりゅう））という江戸時代の公用書体です。

ここに注目！



「出羽守様（でわのかみさま）」は松江藩のお殿様のこと。代々松江藩主の松平氏は出羽守を名乗ることが許されました。松江の人々がよく目にすることばだからでしょうか、手本になっています。

手本（当館蔵）

※展示替えにより今回紹介した箇所と異なる部分を展示している場合があります。

利用案内

基本展示観覧料

大　　人　510円（410円）
小・中学生　250円（200円）
※（　）内は20名以上の団体料金。

年間パスポート

大　　人　1,560円
小・中学生　780円
※１年間（発行日の翌年同月末日まで）有効
松江歴史館の基本展示と企画展示、松江ホーランエンヤ伝承館が何度でもご覧いただけます。

松江歴史館
の
お仕事

保存管理について　①温湿度の管理

博物館では大事な文化財を未来に伝えるため、様々な取り組みを行っています。一つは、温湿度の管理です。一年を通して急激な温湿度の変化がないように、機械と人の目で管理しています。なぜなら、急激な温湿度変化によって、文化財に悪影響が及ぶからです。急に空気が乾燥すると、木でつくられた作品や漆器などが縮んだり、割れたりします。また、湿度が高くなるとカビが発生しやすくなります。

温湿度の急激な変化を防ぐため、展示ケース内に湿度を安定させる調湿材を設置し、環境や温湿度の変化に気付くために毎朝点検を行うなどしています。

調湿材の設置

展示室は空調によって温湿度を調整していますが、暑い夏や寒い冬には、急に外の気温が変化することにより、展示室も外気の影響を受けてしまいます。室内温度に変化が生じると、湿度も変動します。そのため、展示品があるケース内には湿度を安定させる調湿材を設置して、急激な環境の変動が起きないようにしています。

毎朝の見回り

開館前に展示室の点検を行い、資料に変化がないか、温湿度は安定しているかなどをチェックします。急激な温湿度変化を防いだり、もし変化があった場合にも、すぐに気付けるようにするためです。

Information

松江歴史館
からのお知らせ

VRをつかって体験

松江歴史館で国宝松江城天守に登る！

慶長16年（1611）に建った国宝の松江城天守には、段差や急な階段があります。スロープやエレベーターは、建築当初の姿を守るため、つけられません。「松江城天守に登りたいけど、階段や段差が苦手」と思った方は、松江歴史館にお越しください。VRゴーグルを装着し、コントローラーを操作するだけで、天守の中が見学できます。最上階からの景色も楽しめますよ。天守に登ったことがある方も、梁（はり）の近くや井戸の真上といった、VRならではの視点から、建物の魅力を再発見できるはずです。

開催情報

開　催　日／土曜日、日曜日、祝日　※年末年始は除く
受付時間／10：00～11：45、13：00～15：45
当日受付。予約可（開館日の９時から17時に電話でお申込みください）。
体験時間／１人15分程度（操作方法などの説明含む）。
料　　金／無料
対　　象／13歳以上

問い合わせ先
TEL.0852-32-1607

地域ゆかりの資料紹介

わがとこに、何があーかね？

出雲弁で
「わたしたちの地域に何があるの？」
という意味。

秋鹿町編

日本特有の建築技術に檜皮葺と柿葺があります。木の皮や板と、竹の釘を使って屋根を葺く技術です。現在も社殿などにこの技術を見ることができます。

松江市秋鹿町を含む旧秋鹿郡域には、かつてこの技術を用いる職人集団が存在しました。江戸時代には領域を越えて盛んに活動し、「秋鹿の檜皮」は出雲国松江藩領に利益をもたらす存在として知られていました。昭和24年（1949）から5年かけて執り行われた出雲大社の修造遷宮では、秋鹿村の職人7名が屋根の葺き替えに従事しました。その中の一人が使っていた道具が、松江歴史館に寄贈されています。

道具には、檜皮や板などの材料を整形するためのものと、準備した材料を屋根に葺くためのものがあります。平成18年（2006）、これらの道具を使って柿葺を実演してもらいました。その時の記録を見てみます。

先ずはキワリやアラワリ、コヘギと呼ばれる刃物と大小のテヅチ（槌）を使って板を割り、大きさと厚みを整えていきます。加工の段階によって、形や大きさの異なる道具を使い分けていて、刃物は段々と小さく、薄く、軽いものを、槌は小さいものを用いているようです。次に板を削り、縁を加工して、形を整えます。湾曲した刃の両側に柄がついているセンは、ケズリダイの上に置いた板を削る道具。両手で柄を握り、押すようにして板を削ります。クチマワシは板の縁を丸く切る道具で、こちらも刃が湾曲しています。

檜皮を整形するためには、独特の檜皮包丁を使います。不要な部分を取り除き、形や厚みを整えた檜の皮を重ね、刃の先端の尖った部分で叩いて上の皮を下の皮に食い込ませることで1枚に仕立てるのです。

整形した材料を使って屋根を葺きます。口に含んだ竹釘を1本ずつ出しては金槌で打ち付け、板を止めて行きます。檜皮や板を葺くときに使う金槌はヤネカナヅチといいます。頭は小さく格子状の溝があり、柄の背と腹に竹釘を押し込むための金属の板が取り付けられています。片手で材料を押さえながら、もう片方の手だけで竹釘を打つための技と道具の工夫です。傾いた屋根の上で安定して作業できるように腰掛けは三角形になっています。

現在、秋鹿町に檜皮葺職人はいません。しかし残された道具の1点1点が、秋鹿町の檜皮葺職人と、職人達が培った技術の存在を確かに伝えています。

（副主任学芸員　笠井今日子）

屋根を葺くための道具

▲屋根の傾斜にあわせて作られた三角形の椅子（④）に腰掛け、特殊な金槌（⑤）を使って、竹釘（⑥）で檜皮や板を止めます。腰掛けには滑り止めの釘が打ち付けられています。

材料を整形するための道具

▲①板を割るための刃物と槌、②板を薄く削ったり縁を丸く切ったりするための道具、③檜皮を整形するための檜皮包丁。

松江歴史館は、松江市域ゆかりの歴史資料や美術作品を多数収蔵しています。このシリーズでは、収蔵資料や近年調査した資料などを地域ごとに紹介します。今回取り上げる秋鹿町は、南は宍道湖、北は日本海に臨む島根半島を縦断する地域です。秋鹿牛蒡、秋鹿瓦などとともに江戸時代から名が知られた、秋鹿の檜皮葺に関する収蔵資料を紹介します。

松江歴史館NEWS
MATSUREKI
第5号
【2023・夏】
発行／
松江市立
松江歴史館
〒690-0887　島根県松江市殿町279番地
TEL 0852-32-1607
https://matsu-reki.jp/
フェイスブック、ツイッター、インスタグラムでも最新情報を配信中